

言語学習における情意面の一考察 (3)

— 異文化と学習者の情意領域の問題 —

竹 田 明 彦

(武庫川女子大学文学部英米文学科)

A Study of the Affective Domain in Language Learning(3): A Literature Review on Cross-cultural Understanding and Affective Variables

Akihiko Takeda

Department of English, Faculty of Letters,

Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663, Japan

Language and culture are inseparable. No one denies how important it is to teach target language culture. Though the Course of Study prescribes that interest in culture should be enhanced and that a foundation of international understanding should be laid, it doesn't describe a syllabus or methods in teaching culture. English teachers try to introduce some aspects of cross-cultural understanding in his/her class; however, most don't have any educational philosophy about it.

This paper clarifies the following through the literature survey: mental process in cultural learning; the correlation between target-language culture and language proficiency; and acculturation and culture shock in L2 acquisition. This paper also discusses cross cultural understanding in English teaching in Japan and proposes that a concrete guideline of cultural learning should be presented to English teachers in Japan.

言語と文化は切り離せないものであるから、外国語教育で文化を教えることがいかに大切であるかは言うまでもない。わが国の学習指導要領の目標にも「言語や文化に対する関心を深め、国際理解の基礎を培う」と掲げられている。ところが文化のいかなる内容をどのように教えるかは教師に任せられたままである。教師は言語そのものを教えることにとらわれ、文化面は教科書にもられた内容についてふれるのが精一杯である。異文化を教える基本的な考え方もなく試行錯誤の域を脱していない。

本稿は、このような現状を踏まえて英語を教える日本人教師が、授業の中で異文化について何をどのように扱えばよいのかを考える一つのよりどころとなるよう、第二言語教育と外国語教育の場における異文化学習と学習者の情意面についてまとめたものである。

文化学習と学習者の心的活動

文化を「人間が学習によって社会から習得した生活の仕方の総称。衣食住を初め技術・学問・芸術・宗教など物心両面にわたる生活形式の様式と内容をふくむ」¹⁾とするならば外国語や第二言語教育での文化学習は目標言語を話す人々の衣食住、技術、学問、芸術、宗教などを学ぶことになろう。文化学習が言語学習と異なる点について Morgan(1993) は言語学習は意識的に行われるが、外国の文化を受け入れることはしばしば無意識のものであり、目標言語の中でその文化が適当だと実感するようなものであると述べている。²⁾ この見解はあくまでも理想論である。実際には異文化への適応が大きな課題であり、Damen(1987) も、文化学習は不快感やショックを伴

うことがあると述べている。

Culture learning is simply a particular type of human learning related to patterns of human interaction and identification. Because it is so deeply concerned with norms, values, beliefs, world views, and other aspects of subjective culture, it is a type of learning subject to the action of many variables and often accompanied by feelings of discomfort or even shock.³⁾

外国語教育の場では異文化を国際理解と異文化コミュニケーション能力を高めるために意識的に導入しようとしている。異文化を教える場合、限られた時間にどのような内容をいかに教えるかが研究課題である。Pesola(1991)は、①外国語教育で具体的な異文化の体験をさせること、②子供の発達段階を考えて文化を学ばせることを主張し、異文化教育の目標を設定するための資料を先行研究に基づきまとめている。⁴⁾ Herron(1992)はビデオを使った異文化学習の効果を実験研究で明らかにしている。⁵⁾

文化を教えるにあたってBrooks(1968)は文化を5分類しているが、その中の生活様式(pattern of living)が言語教育では重要であると指摘している。⁶⁾日常生活が互いに最も身近なものであり、異文化に住む人々の生活様式は学習者が非常に関心を示す領域であるからであろう。Nostrand(1985)も個人的な経験に関するものが人間の心に最もよくのこり、あまり関心のない細かなこと(unattached details)は忘れてしまうものであると述べている。⁷⁾

新しい文化的な情報を与えたときの学習者はFigure 1.のような心理作用のいずれかを選択することになる。文化的な新しい情報を与えられたとき、その情報はnegativeに働く場合と、positiveに働く場合とがある。Negativeに働く場合には強制的な情報となり、学習者は学習する前の態度をかたくなに守ることになる。またその情報を何とか避けようとする心理が働くことも考えられる。この時には感情に抑制がかかったり、事実の歪曲や、他のものを選択するという心理が現れる。Positiveに働く場合は自国の文化と目標言語の文化の違いを見て、それをそのまま受容したり、以前の自分の態度(姿勢)を寛容していこうとする。また学習活動として行われるrole-playなどにも好んで参加するようになる。

Fig. 1. Mental Processes When Given Cultural Information

New Cultural Information			
Positive		Negative	
(Influential Factors)	(Results)	(Influential Factors)	(Results)
non-coercion	differentiate	coercion	avoid
role-play liking	accept change attitudes	previous attitudes	repress distort select

(Carol Morgan 1993 一部修正)⁸⁾

従って異文化を導入するときに、①強制することを避けて学習者を歪めたり抑圧しないようにすること、②外国の生活を積極的に体験させることが異文化を理解し新しい考え方を取り入れることにつながると考えられる。日本の英語教育では文化は単に知識の伝達の形でしかなかった。それはわが国だけの現象ではなく、外国語教育の場合も概して文化伝達の域を脱しきれなかった。この点についてKramsch(1993)は次のように述べている。

Traditional thought in foreign language education has limited the teaching of culture to the transmission of information about the people of the target country, and about their general attitudes and world views.... It has usually ignored the fact that a large part of what we call culture is a social construct, the product of self and other perceptions.⁹⁾

このように一般的に外国語教育では、目標言語の国の人々についての知識の受け売りだけに終始して、それを

超えることはあまりなかった。

異文化が言語学習に及ぼす影響

異文化がどのように言語習得に影響を及ぼすかを考えるとき、学習者の情意的な領域が大きく関わっていると思われる。Bloom(1964)たちは学習者の情意面を5段階に分けている。異文化の学習は、Figure 2.のように、段階的なこのプロセスを踏むものと考えられる。学習者は異文化に触れ、その文化を受け止め、それに対して何らかの反応をする。次に異文化の中の物、人、行動に関して自らの評価をくだす。それが内在化するにつれて belief(考え方)となり、やがて価値観の体形ができあがりその価値体形がその人そのものとなり、attitude(態度)となって顕在化する。

Fig. 2. Affective Domains and Attitudes

Affective Domains

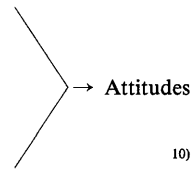
The 1st Level : Receiving

The 2nd Level : Responding

The 3rd Level : Valuing

The 4th Level : Organizing values into a system of beliefs

The 5th Level : Understanding oneself in terms of one's value system



10)

Brown(1994)は、attitudeは ①児童期の初期から発達する ②親、仲間、その他いろいろな人々との出会いの結果生まれてくる ③経験の中で相互に影響を及ぼしている情意因子の影響から生まれる ④自己、他人、および住んでいる社会の文化認識の一部でもあると述べている。

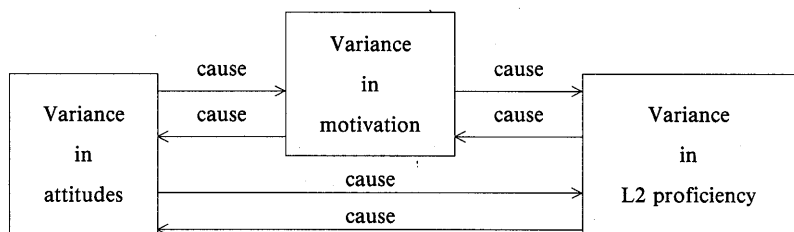
Attitudes, like all aspects of the development of cognition and affect in human beings, develop early in childhood and are the result of parents' and peers' attitudes, contact with people who are "different" in any number of ways, and interacting affective factors in the human experiences. These attitudes form a part of one's perception of self, of others, and of the culture in which one is living.¹¹⁾

Attitudeをこのように見るとき、monocultural societyに住んでいる日本人学習者の中に長年にわたり形成された態度を、限られた時間の文化学習によってどのように変容させるかは大きすぎる課題でもある。

異文化に対する態度と、目標とする言語学習の関係はGardner and Lambert(1972)が英語学習者を対象に英語を母語とする人々への態度を調査し、英語習得との関係を調べた報告がある。¹²⁾彼らの研究では、①いくらかのattitudeが合わさってmotivationが造られる、②その中で最も大切なattitudeは学習者が目標言語を話す人に対するattitudeであると述べている。

その後これに関連する研究報告が数多く行われたが必ずしも一致した結果を生んでいない。Oller and Perkinsは言語能力が態度に影響を及ぼすというGardner and Lambertとまったく逆の仮説を出している。これらの研究を踏ま

Fig. 3. Attitude and L2 / FL Proficiency



13)

えて今日ではまだ仮説の段階であるが、①異文化への態度が言語習得に直接影響を及ぼすのではなく、先ず

motivation に影響を及ぼし、それが学力に影響する、②また学力が motivation に影響して、それが attitude を作ると考えられている。この仮説に基づくと、文化学習を通して目標言語を話す人々への好ましい態度を養うよう指導することによって、それが言語学習を高めていくことにつながると言える。

第2言語習得における文化学習の段階

Damen(1987)の The Paths of Culture Learning は学習者の文化学習の段階を考える点で示唆的である。Hanvey(1976)¹⁴⁾と Kleinjans(1972)¹⁵⁾の研究に基づき Damen は culture learning の迎える学習過程を5つの段階にまとめている。この Table 1. を学習者の情意面から見ると、第1段階は異文化についてほとんど知識がなく異文化をあまり意識しない段階である。次に表面的な文化やエキゾチックな面を意識し、それに陶酔する段階、第3段階になると文化接触が多くなり、自分の文化とは異なった面がみえてきて culture shock を感じる。次に異文化と同時に文化の類似性を見いだすようになるのが第4段階である。最後の段階は異文化を理解して全体的な視野から2つの文化を見ることができ同化や文化適応にいたる。

Table 1. The Paths of Culture Learning

Stage	Cultural/ Social Distance	Levels of Culture Learning		Degree of Acculturation
		(cognitive/affective)	(action)	
1	Maximum	Little or no knowledge of THEM Low awareness	Little interaction; stereotypic	Ethnocentrism
2		Some knowledge; brief experience Awareness of superficial or "ex- otic" features	Intellectual interest; some analysis	Euphoria
3		Much more knowledge and con- tact Greater awareness of differences	More analysis; evaluation; disorientation	Conflict !!! SHOCK !!!
4		Knowledge, experience, and un- derstanding Awareness of important similarities/differences	Accepting; tolerance of the new	Reintegration
5	Minimum	Understanding; insight Empathy	Interactive; mediating	Assimilation Adaptation

(Damen 1987 一部削除)¹⁶⁾

第二言語教育では学習者が目標言語の中で生活をしている場合が多いので、第3段階の culture shock をいかに克服させるかがもっとも大きな関心事となっている。Culture shock の起こる原因について Murdock(1961)は、人々はそれぞれの文化の中の生活で、人間の基本的欲求を満足させているが、その欲求の充し方は各文化によって異なり、異文化の中に住むと今まで慣れ親しんだやり方とは異なるから不安をもち、それが culture shock という形で現れるとしている。¹⁷⁾ Seeley(1984)も、culture shock は価値観の衝突であり、基本的な身体的、心理的欲求を充すための方法の捉え方の違いであると述べている。¹⁸⁾ Adler(1972)はさらに詳しく心理学的な側面から culture shock を説明している。彼によると、culture shock は一種の anxiety であり、それがいろいろな形の防衛規制を通して現われ、その防衛的な姿勢は、孤独、怒り、フラストレーション、自分の能力への疑問といった基本的に深く根ざした不安定な心理状態であると考えている。

Culture shock, then, is thought to be a form of anxiety that results from the loss of commonly perceived and understood signs and symbols of social intercourse. The individual undergoing culture shock reflects his anxiety and nervousness with cultural differences through any number of defense mechanisms: repression, regression, isolation and rejection. These defensive attitudes speak, in behavioral terms, of a basic underlying insecurity which may encompass loneliness, anger, frustration and self-questioning of competence. With the familiar props, cues, and clues of cultural understanding removed, the individual becomes disoriented, afraid of, and alienated from the things that he knows and understands!¹⁹⁾

以上の記述から culture shock とは異文化の中で生活したときに文化の違いから起こって来る不安であり、それはいろいろな形で顕在化すると言える。学習者にとって危機的な場面である。この状況を Clarke(1976) は schizophrenia(精神分裂病)にたとえて説明している。²⁰⁾ 学習者がこの段階をいかにうまく切り抜けるかが言語習得の上で大きな課題になり、教師の指導力が問われるところでもある。

Culture shock は第二言語や外国語の学習上で避けて通ることができない段階であるが、見方を変えると何らかの形で culture shock を経験してこそ初めて異文化のなかで自分が見えてくる。Culture shock なくして異文化コミュニケーションの能力は十分に育たないようにも思える。Adler(1972) も culture shock を異文化を学習する一つのプロセスとしてとらえプラスになる体験であると次のように考えている。

A set of situations or circumstances involving intercultural communication in which the individual, as a result of the experiences, becomes aware of his own growth, learning and change. As a result of the culture shock process, the individual has gained a new perspective on himself, and has come to understand his own identity in terms significant to himself. The cross-culture learning experience, additionally, takes place when the individual encounters a different culture and as a result (a) examines the degree to which he is influenced by his own culture, and (b) understands the culturally derived values, attitudes and outlooks of other people.²¹⁾

わが国の英語教育における異文化理解

わが国の英語教育の中で文化面は単に知識の伝達の形でしか扱われなかった。文化を教えて養われる能力を cultural competence と呼ぶならば、Krasnic(1988) は cultural competence を ① attitude(cultural sensitivity) ② knowledge(cultural awareness) ③ skill(ability) ④ traits(e.g., tolerance and willingness) に分けて考えている。²²⁾ 日本の異文化理解をこれに当てはめて見ると、②の knowledge の部分だけが先行している。

深沢(1992) が Littlewood(1983) の文献をもとにして述べているように、日本の英語教育の異文化理解は、英語を外国語として学ぶのであるから、英語文化圏に合わせた性格や行動スタイルの変化を伴う同化を目標とするのではない。将来遭遇するどのような文化の多様性にも対処できる bilingual で multicultural な視点、態度を育てることにある。²³⁾ その上にならば異文化コミュニケーションの能力が求められている。

わが国の異文化教育は、国際理解と円滑な異文化コミュニケーションのために行われ、研究報告もいくらかある。異文化に焦点を当てた最近の研究では、「異文化理解を深める授業」として異民族についての固定観念を調べた川村・Sloss(1993) の研究、²⁴⁾ アメリカ人と日本人では不快を感じる状況が異なることを明らかにした佐々木(1993) の研究などがある。²⁵⁾ また伊原(1992) は英語の orange と日本語のオレンジ色の意味の違いや、「かぼちゃ」を家畜の餌や貧乏人の食料に考える英語国民に対して、日本人はこの時期によく「かぼちゃ」を食べると話したときに起こる誤解などを例にあげて、異文化間で英語が使われる時のトラブルは基本的に文化背景を知らないで言葉を使うことにあるという問題点を指摘している。²⁶⁾

前述した acculturation(文化変容)を軸にして文化学習を段階に分けて考えるとき日本の学校教育の英語授業で扱われる異文化教育は第1段階あるいは第2段階であろう。Acculturation のこの段階では適切な文化的内容を含んだ教材を与え、うまく指導すれば学習者の motivation が高まるはずである。

異文化と情意面の研究もわずかながら行われてきた。小西(1993)は大学生を対象にして目標言語の文化に対する態度と listening proficiency の関係を調べたが、リスニングの学力差による文化に対する態度 (attitude toward cultures) の有意差は見られなかったことを報告している。²⁷⁾ 学力を高める要因としてはいろいろなものがあるから当然の結果だとも考えられ、この報告は態度と学力はそう簡単に結び付かないことを教えるもと受け止めたい。Gardner らと同じ質問項目を用いて調査した三宅(1975)も、日本人学習者には統合的動機づけが強いが、英語学力との相関はまったく無いが、あるいはあったとしても非常に低いと報告している。²⁸⁾

八代(1991)は speaking をするときの文化的、心理的な壁について取り上げている。彼女は日本人が英語でコミュニケーションしながらないのは、文化的な背景に原因があると考えた。たとえば英語の文体は直線的であり、直接的である。このような文体を使えば aggressive な印象を与えないかという不安が日本人にはある。「たて社会」の言葉である日本語の主語「私」は、状況によっていろいろな言葉が使われる。先生に対しては「わたくし」、同僚には「僕」、子供に対しては「お父さん」である。ところが、平等社会の言葉である英語はすべて「I」を使う。あまりにもかけ離れた言葉の違いに戸惑いを感じる日本人特有の精神構造を説明して、それを学習者の不安に結び付けて考えている点でユニークな考察である。²⁹⁾

学習者が異文化のどのような面に興味をもつかを調査した研究もある。深沢(1980)は文化を(A)外国の地理、歴史、自然風物、(B)外国人の日常生活様式、ものの見方、考え方、(C)芸術、科学、および哲学的遺産に3分類して、興味が高い題材と低い題材を調べた。中学3年の段階から(C)の題材が多くなるが生徒は学年が進んでも(B)の自分たちの身のまわりの生活場面や英語社会のエピソードを求めていると報告している。³⁰⁾ 奥山(1987)はAETの国の食事や学校生活など身近な話題に学習者が強い興味を示すと報告している。³¹⁾

学校教育にも外国人が入るようになって直接体験はある程度教室でも可能になってきたので、異文化理解の楽しい授業が可能になってきた。しかし本当の意味で異文化理解を通して日本人のもつ固定観念を取り除くには時間がかかるであろう。小学生・中学生に対するフランス語教育が文化理解にどのように寄与するかを実証的に研究した結果、学習者の持つ文化理解や固定観念にはほとんど変化がなかったという Byram, et al. (1991)の研究報告もある。³²⁾ よほど計画的な指導が工夫され、継続的に実践されない限り cultural competence を養うことは不可能であろう。文化的な同化や適応も実際にはむずかしいことであろう。

異文化教育の今後の課題

異文化教育(学習)に関する文献を概観すると、第二言語教育では culture shock の問題が大きく取り上げられ、それをいかに克服させるかが中心テーマであった。外国語教育では異文化について何をどのように教えるかに関心がある。学習者が異文化を知ることによって国際理解が深まり、それが異文化コミュニケーションに役立つと期待されている。

最近わが国では異文化理解のための書物が、『欧米人が沈黙するとき—異文化間コミュニケーション』³³⁾をはじめとして『実例でみる日米コミュニケーションギャップ』³⁴⁾などたくさん出版されている。教材開発もすすめられ、教科書はいろいろな国々を取りあげるようになった。1990年度文部省検定済教科書(中学校英語)で取り扱われている外国はUSAがもっとも多く、次いでカナダ、オーストラリア、アメリカ、イギリス、中国、ケニアの順となっている。他にも朝鮮、トルコ、オランダのような英語圏以外の国も扱われている。³⁵⁾ところがこのような教材は学習者が異文化に対してすべての領域で好奇心を示し、興味をもっていることを前提にしてすすめられているように思われる。Seeley(1984)が情意面の目標としてあげているように、先ず学習者が異文化に好奇心を示すことが重要であり、それが異文化学習の出発点であろう。幅広い異文化の中で学習者が興味をもっている領域の調査研究や、好奇心をかりたてる教育方法の地道な実践研究が望まれる。

Seeleyはまた情意面の目標として学習者が目標言語を話す人々に共感を示すことをあげ、異文化に住む人々に共感を示す態度変容は実際に異文化の中でしばらく生活をする直接体験が効果的であるとしている。³⁶⁾最近わが国でも英語を話す国に出かけて行くようになった。短期間滞在をして intensive training を受けるケースが増え、異文化を直接体験する機会も多い。見るもの聞くものがすべて珍しく、好奇心もあっていろいろな場所に出かける。海外の英語研究の楽しさは学習者の綴る体験記によく表れているが、motivation にいかに影響してそれが学力につながっていくのか、また acculturation がどのように進んで行くかを明らかにした研究報告は見あ

たらない。

異文化を計画的に教えるシラバスはすでにカナダやイギリスで具体化している。カナダでは The National Core French Study (NCFS) と呼ばれる第二言語としてのフランス語教育プロジェクトが行われ、その中で「単純なものからより複雑なものへ」「地元に関するものからより遠くの事柄へ」といった段階を踏まえて文化が扱われ、具体的な到達目標も述べられている。³⁷⁾ イギリスでは Modern Foreign Languages in the National Curriculum (1991) に具体的な方針が示されている。異文化の指導分野が、たとえば Everyday Activities や Personal and School Life などのように areas of experiences として7つのカテゴリに分けられ、さらに各領域ごとに home life や daily routine などのトピックスを決めている。³⁸⁾ いずれも small-c と呼ばれる身近な日常生活の中の文化が重視されている。日本の英語教育でも異文化面の指導についてこのような具体的なシラバスが望まれる。

引用文献

- 1) 新村 出(編), 『広辞苑』, 岩波書店, 東京, 第二版補訂版, p.1976(1980)
- 2) Morgan, C., 'Attitude change and foreign language culture learning', *Language Teaching*, 26, p. 69(1993)
- 3) Damen, L., *Culture Learning: The Fifth Dimension in the Language Classroom*, Addison-Wesley, Reading, p. 216(1987)
- 4) Pesola, C. A., 'Culture in the Elementary School Foreign Language Classroom', *FLA* 24, 4, pp. 331-346(1991)
- 5) Herron, C. A., 'Using Video to Introduce Children to a Foreign Culture', *FLA*, 25, 5, pp.419-427(1992)
- 6) Brooks, N., 'Teaching Culture in the Foreign Language Classroom', *FLA* 1.3, pp.204-217(1968)
深沢清治, 「異文化理解・異文化コミュニケーションを目指した英語教育」, 『英語教育』, 41.7, pp.66-67(1992) を参照した。
- 7) Nostrand, H. E., "Horizontal" Coordination, Foreign Language and Social Studies: An Editorial', *MLJ*, 69, 1, p.41(1985)
- 8) 前掲2)Morgan(1993), p.69
- 9) Kramsch, C., *Context and Culture in Language Teaching*, Oxford University Press, Oxford, p. 205(1993)
- 10) Krathwohl, D. R., Bloom, B., and Masia, B. B., *Taxonomy of Educational Objectives Handbook II : Affective Domain*, David McKay Company, New York, pp.65-174(1964)
Brown, H. D., *Principles of Language Learning and Teaching*, Prentice-Hall Regents, USA, 3rd ed. pp.135-136(1994) を参照した。
- 11) 前掲10)Brown(1994), p.168
- 12) Gardner, R. C. and Lambert, W. E., *Attitudes and Motivation in Second Language Learning*, Newbury House, Rowley, Mass., (1972)
- 13) 小池生夫(監), 『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』, 大修館書店, 東京, p.132(1994)
- 14) Hanvey, R. 'Cross-cultural awareness' In E. Smith and L. Luce(eds.), Reprinted from R. Hanvey. *An attainable global perspective*, Center for Global Perspectives, New York, (1976)
- 15) Kleinjans, E., 'On culture learning : paper no.13', Japan Association of College English Teachers' Annual Conference, Hachioji, (1972)
14), 15) は前掲3)Damen(1987), p.219 を参照した。
- 16) 前掲3)Damen(1987), p.218
- 17) Murdock, G. P., 'The cross-cultural survey', In F. W. Moore, *Readings in Cross Cultures*, New Heaven, CN : HRAF Press, (1961)

- 前掲10)Brown(1994), p.164を参照した。
- 18) Seeley, H. N., *Teaching Culture*, National Textbook Company, Lincolnwood, Illinois, p.96(1984)
- 19) Adler, P., 'Culture shock and the cross cultural learning experience', *Readings in Intercultural Education*, Volume 2, Pittsburgh : Intercultural Communication Network, (1972)
- 前掲10)Brown(1994), p.171を参照した。
- 20) Clarke, M. A., 'Second language acquisition as a clash of consciousness', *LL*, 26, pp.377-390(1976)
- 21) 前掲10)Brown(1994), p.173
- 22) Krasnic, H., 'Dimensions of cultural competence: Implications for the ESL curriculum', *TESL Reporter*, 21, 3, pp.49-55(1988)
- Lessard-Clouston, M., 'Assessing Culture Learning: Issues and Suggestions', *CMLR*, 48, 2, p.328(1992)を参照した。
- 23) 前掲6)『英語教育』41, 7, p.65
- 24) Kawamura, Y. and Sloss, K., 'A Class to Increase Cross Cultural Understanding : Challenging Ethnic Stereotypes', *Annual Review of English Language Education in Japan*, 4, pp.107-115(1993)
- 25) Sasaki, Y., 'Different Discomfort Levels in Intercultural Communication Situations between Japanese and American Students', *Annual Review of English Language Education in Japan*, 4, pp.127-135(1993)
- 26) Ihara, T., 'Copying with Cross-Cultural Communication Problems in English', *Annual Review of English Language Education in Japan*, 3, pp.129-137(1992)
- 27) Konishi, M., 'Correlation between the Attitudes toward Cultures and the Proficiency in English: A Study on Japanese University Students', 『立正大学教養部紀要』26, pp.231-250(1993)
- 28) 三宅なほみ, 「動機づけ」, 長野重史(編), 『講座・英語教育工学第2巻:教授・学習の過程』, 研究社出版, pp.218-229(1975)
- 高橋成信, 「異文化理解・異文化コミュニケーションを目指した英語教育」『英語教育』, 41, 7, p.69(1992)を参照した。
- 29) Yashiro, K., 'Cultural and Psychological Barriers of Japanese when Speaking in English'『外国語教育論集(筑波大学外国語センター)』13, pp.21-36(1991)
- 30) 深沢精治, 「文化的題材と学習者の興味に関する一考察」, 『中国地区英語教育学会研究紀要』, 10, pp.11-16(1980)
- 31) 奥山和行, 「ティーム・ティーチングによる英語授業一話す機会をどう増やすか」『英語教育』36, 4, pp.26-27(1987)
- 32) Byram, et al., *Cultural Studies and Language Learning: A Research Report*, Multilingual Matters, (1991)
- 前掲6)『英語教育』41, 7, p.65を参照した。
- 33) 直塚玲子, 『欧米人が沈黙するとき—異文化間のコミュニケーション』, 大修館書店, 東京, (1980)
- 34) 西田ひろ子, 『実例でみる日米コミュニケーションギャップ』, 大修館書, 東京, (1989)
- 35) 堂鼻康晴, 「ELTクラスにおける異文化教授の試み(1)—学習者の異文化に対する Knowledgeに関する実態調査」, 第20回全国英語教育学会発表資料(1994)
- 36) 前掲18)Seeley(1984), pp.57-58
- 37) LeBlanc, C. and Courtel, C., 'Executive Summary: The Culture Syllabus', *CMLA*, 47, pp.82-92(1990)
- 38) Department of Education and Science and the Welsh Office, *Modern Foreign Languages in the National Curriculum*, (1991)